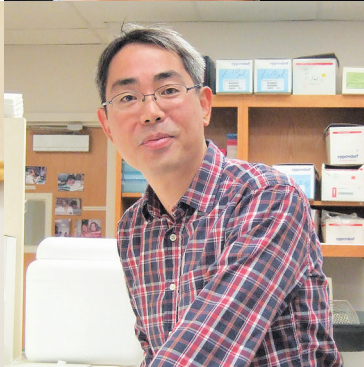
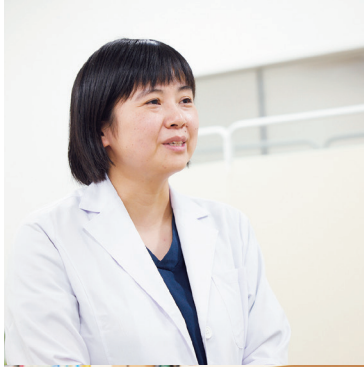


京都大学の 研究者が描く、 125年後の 地球社会

くすのき・125 採択者紹介 | Vol.2 |



京都大学
KYOTO UNIVERSITY

125年後の地球社会に向けた研究が、 いま、京都大学ではじまっています。



1897年に京都大学が創立されて以来、地球社会は大きく変化してきました。地球環境の深刻な変化、多様な価値観の表面化、感染症の世界的流行などに直面し、既存のパラダイムは行き詰まりを見せています。そんな状況の中、2022年に創立125周年を迎えた京都大学が、今だからこそ未来に向けて歩むべき方向を見据え、学内・学外の垣根を超えて魅力ある地球社会の未来像を構築・発信していきたい。そんな思いを胸に、新たな学内ファンド【くすのき・125】を立ち上げました。京都大学には、「創立以来築いてきた自由の学風を継承し、発展させつつ、多面的な課題の解決に挑戦し、地球社会の調和ある共存に貢献する」という基本理念があります。この基本理念に立ち返り、既存の価値観にとらわれない自由な発想で、次の125年に向けて、調和した地球社会のビジョンを自ら描き、その実現に向けて挑戦していく「おもろい」次世代研究者を【くすのき・125】は支援します。

くすのき・125とは

京都大学のシンボル「くすのき（楠）」は、ゆっくりと長い時間をかけて着実に大木へと生長します。このことから、ゆっくりであっても堅実に成長し、大成する学問は「楠学問」と呼ばれています。

【くすのき・125】は、京都大学が125年後、さらにそのずっと先まで、そのような研究・学問を育てる場となるようにとの想いを込め命名された、皆様からの寄付金を学内の教員に提供する学内ファンド（京都大学がめざす目標に向けて、京都大学が持つ資金を学内の教職員等に提供する制度）です。



上田先生が研究に使用している
超高磁場MRI装置

「無関心の関心」と呼ばれる哲学の概念を検証

さらに詳しい話は
こちらから



「美」を問う人文知の歴史に、 新たな学問領域をひらく。 「美を体験するところと脳—実証的人文科学の確立」



上田 竜平

UEDA RYUHEI

人と社会の未来研究院 助教

2019年、京都大学大学院文学研究科博士課程修了。国立研究開発法人情報通信研究機構脳情報通信融合研究センター特別研究員を経て、2022年より現職。専門は認知神経科学。恋愛関係の構築と維持に関わる認知・神経機構の働きについて、心理実験と脳機能イメージング手法を用いて研究している。

芸術作品を「美しい」と感じる時、ひとの心の中でどんなことが起こっているのでしょうか。この問題について、美学や哲学といった分野ではさまざまな理論が提唱されてきましたが、それらを科学的に立証しようとする研究はほとんどありませんでした。そこで私は心理学や神経科学の手法を用いて、芸術作品を目にしたときに生じる

することに組み込まれます。具体的には、実験参加者の脳活動を計測した状態でさまざまな画像を見てもらい、芸術作品を目にしたとき特有の脳のはたらきを突き止めることをめざします。この研究によって長い歴史をもつ人文知と最先端の認知科学を結びつけ、芸術のあり方が変わるような新しい思考の枠組みを世の中に提示したいと考えています。

04 「美」を問う人文知の歴史に、新たな学問領域をひらく。
「美を体験するところと脳—実証的人文科学の確立」
上田 竜平 人と社会の未来研究院 助教

ゲノムから地球規模の循環まで。湖に棲む微生物を多角的に探究する。
「環境微生物・ウイルスのドライな謎にウェットに迫る」
岡崎 友輔 化学研究所 助教

05 生命にとって「音」とはなにか? 科学の未踏領域を探究する。
「『音』を利用した次世代バイオテクノロジーへの挑戦」
桑田 昌宏 生命科学研究所 助教

区別から包摂へ。誰もが違いを認め合い活躍できる社会をめざす。
「発達障害への理解が切り開くダイバーシティ」
上月 遥 医学部附属病院 助教

06 地域の健康を守る保健師とともに、ウェルビーイングな未来を創る。
「公衆衛生看護ケアのイノベーション基盤の構築」
塩見 美抄 医学研究科 准教授

神経細胞同士のミクロな繋がりから、人間の脳のはたらきの謎に迫る。
「神経細胞を用いた高次脳機能再現法の確立」
田中 洋光 理学研究科 助教

07 生きづらさを抱える一人ひとりが必要な支援を受けられる社会をめざして。
「『脳腫瘍になった。だけど未来がある』を支えたい」
田畑 阿美 医学研究科 講師

縁の下の力持ち「触媒」の力で、究極の循環型社会を実現する。
「『たいよう』と『みず』の力によって実現するカーボンニュートラル」
寺村 謙太郎 工学研究科 教授

08 野生動物とヒトの関わり方を問い直し、人々の意識を変えていきたい。
「ヒトと動物の共存する未来のために」
徳山 奈帆子 野生動物研究センター 助教

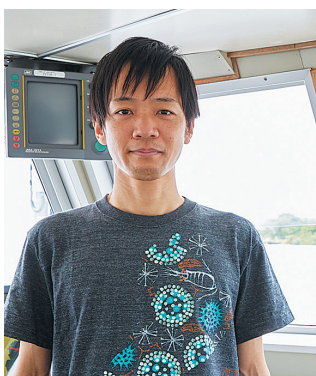
貴重なドナー肺をできる限り救い上げて、いのちをつないでいく。
「臓器提供数と移植数の調和を目指した肺移植医療の実現」
中島 大輔 医学研究科 講師

09 分子の自己集合現象を理解し、これまでにない素材を生み出す。
「第三の素材：高機能タンパク質のデバイス素子化」
藤田 大士 高等研究院 物質-細胞統合システム拠点 (iCeMS) 准教授

ひとりでも多くの笑顔を守るため、周産期医学の未解決課題に挑戦する。
「健康な赤ちゃんを：前期破水・早産を減らす」
最上 晴太 医学部附属病院 講師

10 子どものこころの発達を見守り、健やかな成長を支援する。
「子どもが未来を選べる社会の実現：未来開拓学」
森口 佑介 文学研究科 准教授

無機物から細胞まであらゆるものを繋ぐアパタイト、その可能性を追求する。
「医療レス社会の実現に貢献する『アパタイト学』の構築」
藪塚 武史 エネルギー科学研究科 講師



岡崎 友輔

OKAZAKI YUSUKE

化学研究所 助教

2018年、京都大学理学研究科博士後期課程修了。日本学術振興会特別研究員を経て、2020年より現職。専門は微生物生態学。琵琶湖をはじめとする大水深淡水湖を主な対象として、フィールド(調査)・ウェット(実験・観察)・ドライ(ゲノム解析)の3つのアプローチで研究に取り組んでいる。



琵琶湖に浮かぶ調査船「はす」

琵琶湖からコップ一杯分の水をすくうと、その中には日本の人口と同じぐらいの数の細菌と、世界の人口と同じぐらいの数のウイルスが含まれています。こうした微生物が織りなす生命現象を解き明かすことで、自然界の生態系や物質循環、ゲノムの多様性、進化のプロセスなどを明らかにするのが微生物生態学です。微生物生態学は現在、ゲノム解析技術の進歩で飛躍的な発展を遂げています。一方

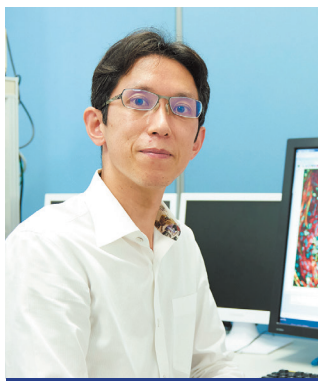
さらに詳しい話は
こちらから



「環境微生物・ウイルスのドライな謎にウェットに迫る」

ゲノムから地球規模の循環まで。湖に棲む微生物を多角的に探究する。

琵琶湖からコップ一杯分の水をすくうと、その中には日本の人口と同じぐらいの数の細菌と、世界の人口と同じぐらいの数のウイルスが含まれています。こうした微生物が織りなす生命現象を解き明かすことで、自然界の生態系や物質循環、ゲノムの多様性、進化のプロセスなどを明らかにするのが微生物生態学です。微生物生態学は現在、ゲノム解析技術の進歩で飛躍的な発展を遂げています。一方で、ゲノム解析で得られた仮説を検証するためには、培養・実験といったウェットな研究も不可欠です。くすのき・125では、培養の難しい微生物を単離培養するためのプラットフォームをつくることで、ゲノム解析で示唆された謎や湖の物質循環の全貌に迫り、ひいては自然界への理解を深める手がかりにしたいです。



桑田 昌宏

KUMETA MASAHIRO

生命科学研究所 助教

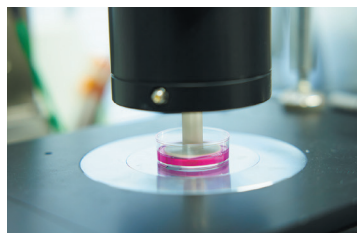
2010年、京都大学大学院生命科学研究所博士後期課程修了。同年より現職。専門は細胞生物学。哺乳類の細胞内の複雑な構造を形成するタンパク質群の構成と動態や、細胞内情報伝達の仕組みの解明に取り組む。さらに、近年は可聴域音波に対する細胞応答の探索に精力的に取り組んでいる。

生命にとって「音」とはなにか？
科学の未踏領域を探究する。

「『音』を利用した次世代バイオテクノロジーへの挑戦」

動

物は空気中や水中を伝わる圧力変動の波を内耳組織で受容したあと、脳で解釈してはじめて「音」として認識しています。それでは、脳を持たない微生物や細胞一つひとつにとって音は意味をなさないのでしょいか？ 私は生命にとって音がもつ本質的な意味を探究するため、音が細胞に与える影響を解明する研究に取り組んでいます。哺乳類の細胞に音波を直接照射すると、細胞はたしかに音波に応



細胞を培養しているディッシュ内に音波を照射する装置

答することがわかってきました。近年、生命科学では光や重力、熱といった非物質が生命活動におよぼす影響に関する研究が盛んになりつつあります。新たに音という非物質の研究分野を拓くことで、基礎科学としての生命科学の幅を広げるとともに、医療やバイオテクノロジーにも応用したいと考えています。

さらに詳しい話は
こちらから



区別から包摂へ。
誰もが違いを認め合い活躍できる社会をめざす。

「発達障害への理解が切り開くダイバーシティ」

個

個人の多様なあり方を認めていこうという社会の潮流のもと、神経発達症、いわゆる発達障害の人々の存在も広く知られるようになってきました。現在はそうした人々をいかに支援していくかが課題とされていますが、将来的には一人ひとりの凸凹の特性をよく理解した上で適材適所に配置し、誰もが活躍できる社会をつくっていくべきでしょう。特に神経発達症と診断された子どもが長所を伸ばして

社会に適応していくためには、子どもの生育に関わる医療、福祉、教育といった分野間の連携が不可欠です。しかし残念ながら、そうした連携を後押しするエビデンスはまだ不足しています。そこで私は、医療の立場から教育現場の先生に介入することで、子どもを取り巻く環境にどんな影響が現れるかを明らかにしたいと考えています。

さらに詳しい話は
こちらから



塩見 美抄

SHIOMI MISA

医学研究科 准教授

千葉大学看護学部卒業。保健師として勤務後、2009年に神戸大学大学院医学系研究科博士課程修了。兵庫県立大学看護学部准教授などを経て、2020年より現職。専門は公衆衛生看護学で、地域社会の健康管理を担う保健師の地域アセスメントのモデル化と教育プログラムの開発などに携わる。

地域の健康を守る保健師とともに、
ウェルビーイングな未来を創る。

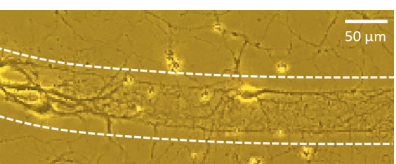
「公衆衛生看護ケアのイノベーション基盤の構築」

地

域社会の健康課題に取り組む保健師という仕事は、誰もが自分らしく、ウェルビーイングに暮らせる社会を実現するためになくてはならない存在です。目まぐるしく変化する社会環境のなかで保健師さんをはじめとする現場の方々が未来を切り開いていけるように、私は2つの視点から拠点づくりに取り組めます。ひとつは大学の研究知見と現場の実践をつなげるブリッジとなるよ

うな拠点、もうひとつは実践のあり方を刷新し、未来のビジョンを示すようなイノベーションの拠点です。まずはオンラインの拠点として、「公衆衛生看護イノベーションセンター」というウェブサイトを開設しました。くすのき・125の3年間で、斬新な発想を持った保健師さんを募集して、一緒に未来への提言をまとめたいと考えています。

さらに詳しい話は
こちらから



独自の実験技術により、ガラス面上に神経回路を培養することが可能になった

神経細胞同士のマイクロな繋がりから、
人間の脳のはたらきの謎に迫る。

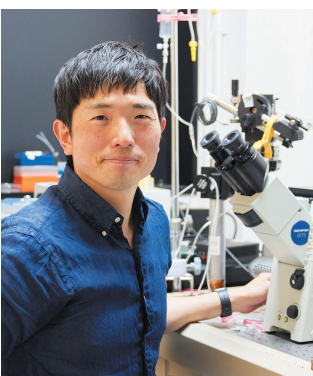
「神経細胞を用いた高次脳機能再現法の確立」

人

人間の脳機能は、1000億から1500億個の神経細胞が末端のシナプスによってつながり、絶え間なく情報伝達を行うことで維持されています。私は、シナプスが情報伝達効率を制御するメカニズムを明らかにすることで、ものごとを考えたり記憶するといった高次脳機能の成り立ちを理解したいと考えています。現在はシナプスの情報伝達や構造に関する基礎研究を積み上げながら、神経細胞同士が繋がって情報伝達を行う道筋、神経回路

をシャーレの上に人工的に作りだす研究に取り組んでいます。この技術が確立できれば脳機能を解明する基礎研究に広く活用できるほか、脳機能障害をもつ方に対して、失われた脳機能を人工の神経回路で補う移植治療にもつなげることができると期待しています。

さらに詳しい話は
こちらから

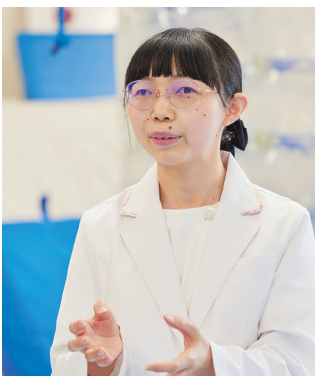


田中 洋光

TANAKA HIROMITSU

理学研究科 助教

2012年、京都大学大学院理学研究科博士後期課程修了。2013年より現職。専門は神経科学。神経細胞間で情報伝達を行う部位であるシナプスに着目して、記憶・学習といった高次脳機能を司る分子機構の解明に取り組む。また、基礎研究で得られた知見をもとに、神経細胞の培養による局所神経回路の再現にも取り組んでいる。



田畑 阿美
TABATA AMI
医学研究科 講師

2018年3月、京都大学大学院医学研究科博士後期課程研究指導認定退学。2018年7月 京都大学博士（人間健康科学）取得。京都大学医学部附属病院 リハビリテーション部作業療法士、医学研究科助教などを経て、2022年より現職。脳腫瘍を中心としたがん患者のリハビリテーションを研究しながら、社会復帰に向けた支援体制の構築をめざし、ピアサポートなど支援の場の環境整備にも取り組んでいる。

生きづらさを抱える一人ひとりが
必要な支援を受けられる社会をめざして。

「『脳腫瘍になった。だけど未来がある』を支えたい」

医

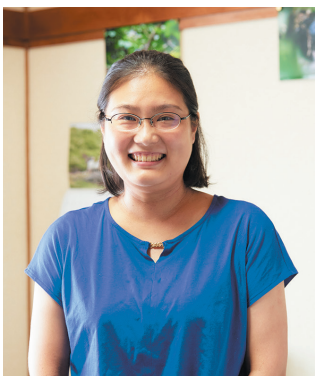
療の進歩により、脳腫瘍の生命予後は改善しつつあります。しかし腫瘍を取り除いた後も、高次脳機能障害など周囲からは見えづらい脳機能の障害が残り、社会生活に困難さを抱えておられる方が多いことはあまり知られていません。私自身も3歳と13歳のときに脳腫瘍の手術を受け、その後の周囲の無理解に苦しんだ経験があります。脳腫瘍を経験された方が安心して社会に復帰するために

は、社会全体が脳腫瘍についての正しい知識を持ち、ライフステージに応じた支援が必要であるという共通認識をもつこと、そして、医療と地域社会が繋がりが長期的な支援体制が構築されることが不可欠です。私は医療人として、教育者として、当事者として、生涯をかけてこうした社会の実現に貢献したいと考えています。

さらに詳しい話は
こちらから



脳腫瘍の治療開始前の小児の患者さんに、今後の支援の方針を決めるための初期評価を行う田畑先生



徳山 奈帆子
TOKUYAMA NAHOKO
野生動物研究センター 助教

2016年、京都大学大学院理学研究科博士課程単位取得退学。博士（理学）。日本学術振興会特別研究員（SPD）、京都大学霊長類研究所などを経て、2022年より現職。専門は霊長類学・行動生態学。コンゴ民主共和国・ルオー保護区にてボノボの調査を行う。主な研究テーマは、ボノボの集団内におけるメス間関係や集団間の社会関係。調査と並行して、ボノボの生息地の保全活動や、日本国内での啓発活動などにも幅広く取り組む。

野生動物とヒトの関わり方を問い直し、
人々の意識を変えていきたい。

「ヒトと動物の共存する未来のために」

ボノボはコンゴ民主共和国に生息しているチンパンジーと近縁の類人猿で、ヒトを進化的に理解する上でも貴重な存在です。しかし、生息地破壊や食肉・ペットとしての密猟によってその数は減り続けています。私はこれまで現地の人々と共にボノボの保全に取り組んできました。そのなかで、人々の生活を改善するとともに、自然に対する正しい認識を持つてもらうことが課題だと感じています。一方、

日本国内に目を向けると、ペットブームで海外産の野生動物、とりわけスローロリス、ショウガラゴ、マーモセットといった小型霊長類の密輸入が後を絶たず、動物福祉の観点でも看過できない問題となっています。くすのき・125では、ボノボの生息地と日本、それぞれで人々の意識調査や啓発活動に取り組みたいと考えています。

さらに詳しい話は
こちらから



コンゴ民主共和国・ルオー学術保護区に生息するボノボ

縁の下の力持ち「触媒」の力で、
究極の循環型社会を実現する。

「『たいよう』と『みず』の力によって実現するカーボンニュートラル」

こ

これまで人類は、石油や石炭、その他さまざまなモノをつくっては使い、最終的には燃やしてCO₂として大気中に排出してきました。私の究極の目標は、地球上に無尽蔵に存在する水や降り注ぐ太陽光を利用して、一度排出されたCO₂からさまざまなモノをつくりだすことです。その第一歩として、光触媒を使ってCO₂を還元し、化学製品の原料となる高濃度のCOをつくり出す研究に取り組

んでいます。数限りない物質の中から有用な光触媒を探し出す実験を10年以上続けて、紫外線を照射することで反応を促進する一定水準以上の光触媒を19個発見しました。次のステップは反応に太陽光を利用することです。くすのき・125では、可視光線に応答する光触媒を見つけてくださる研究に取り組んでいます。



持続可能な社会を実現する二酸化炭素再資源化
CO₂と水と光からさまざまな物質を合成することで、「使った資源を元に戻す」究極の循環型社会をめざす

さらに詳しい話は
こちらから



寺村 謙太郎
TERAMURA KENTARO
工学研究科 教授

2004年、京都大学大学院工学研究科博士後期課程 研究指導認定退学。博士（工学）。東京大学大学院工学系研究科特任助手、京都大学次世代開拓研究ユニット(テニュアトラック)特定助教、同大学工学研究科准教授などを経て、2022年より現職。専門は触媒化学で、光触媒の反応機構の解明や光触媒を用いた二酸化炭素の還元に取り組む。

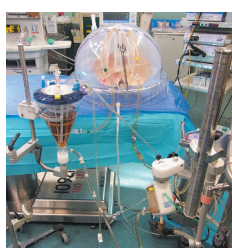
貴重なドナー肺をできる限り救い上げて、
いのちをつないでいく。

「臓器提供数と移植数の調和を目指した肺移植医療の実現」

肺

移植は重症な呼吸器疾患を抱える患者さんにとって重要な治療法ですが、日本では深刻なドナー不足のため待機期間中に亡くなられる方も少なくありません。脳死状態になった方のドナー肺を移植する脳死肺移植、健康なご家族の肺の一部を移植する生体肺移植、それぞれが抱える課題を解決することで一人でも多くの患者さんを救いたいと考えています。脳死肺移植では、これまで適応外だった肺

炎のドナー肺をEVLVPというシステムを使って治療してから移植につなげる「体外テラーメイド治療」の研究に取り組みます。生体肺移植では、ドナーさんと患者さんの血液型が適合していないケースで患者さんの抗体を一時的に抑える脱感作療法を徹底して行うことで、世界初のABO血液型不適合生体肺移植を成功させたと考えています。



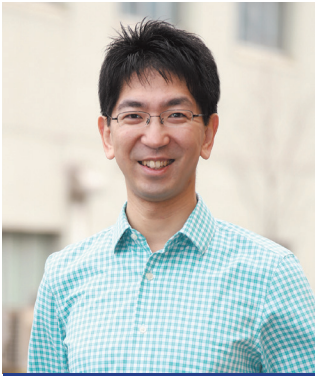
ドナー肺の機能を評価するために使われるEVLVP (Ex vivo lung perfusion)

さらに詳しい話は
こちらから



中島 大輔
NAKAJIMA DAISUKE
医学研究科 講師

2001年、京都大学医学部卒業。呼吸器外科医として京都大学医学部附属病院、市立静岡病院、日本赤十字社和歌山医療センターに勤務後、2009年に京都大学大学院医学研究科博士課程入学。2016年に博士号取得。2012年から2017年にトロント大学に留学。2017年に京都大学医学部附属病院・助教に着任し、2019年より現職。専門は呼吸器外科学で、EVLVPによるマージナル肺の評価と移植前治療、ABO血液型不適合生体肺移植などの研究テーマに取り組んでいる。



藤田 大士

FUJITA DAISHI

高等研究院物質-細胞統合システム拠点 (iCeMS) 准教授

東京大学大学院工学系研究科博士課程修了。同助教、JSTさきがけ「超空間制御と革新的機能創成」研究者(兼任)などを経て、2018年度より現職。専門は超分子化学、タンパク質化学。複数の分子が自律的に複合体を形成して高次構造を構築する「自己集合」に着目し、最先端の自己集合技術を用いてタンパク質の機能を制御・改変、新しい活用法を見出す研究に取り組んでいる。

分子の自己集合現象を理解し、これまでにない素材を生み出す。

「第三の素材・高機能タンパク質のデバイス素子化」

自

自己集合とは、多数の分子が分子同士の相互作用を通じて、ひとりでに秩序だった構造を組み上げる現象です。生物の細胞内では、タンパク質が自己集合によって高次構造を形成しています。これによってそれぞれのタンパク質の機能が発揮され、高度な生命活動が成り立っています。しかし、自己集合がなぜ起こるのか、統一的に示す原理はわかっていません。そこで私たちは、まず分子自

己集合現象を統一的に説明する理論をつくることをめざします。次にその理論を活用して、自在な分子集合体を設計することまでが目標です。とくに、生体システムはエネルギー効率が高いため、開発した自己集合技術を用いた、生体・人工系のハイブリッド材料の実現も可能であると考えています。

さらに詳しい話は
こちらから



自己集合現象の理論化をめざして作られた自己集合生成物の模型



森口 佑介

MORIGUCHI YUSUKE

文学研究科 准教授

2008年、京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了。上越教育大学学校教育研究科・講師、同准教授、JSTさきがけ「脳情報の解読と制御」研究者(兼任)などを経て、2016年に京都大学大学院教育学研究科に着任。2020年より現職。専門は発達心理学。乳幼児の認知的世界が成人のものとのように異なるのかに関心を持ち、主に自制心や思いやりといった能力の発達について研究している。

子どものこころの発達を見守り、健やかな成長を支援する。

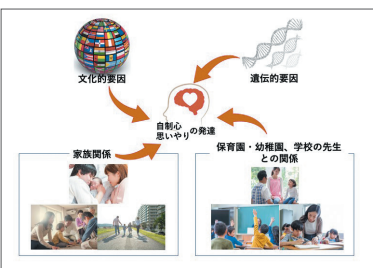
「子どもが未来を選べる社会の実現：未来開拓学」

子

子どもの将来の健康や経済状況を左右する要因のひとつとして、自制心や思いやりといった能力が挙げられます。これらは親密な親子関係によって育まれることがわかりつつありますが、すべての子どもが円満な家庭環境で育つわけではなく、発達を社会的に支援することも必要です。そこで私は、発達心理学の知見を社会に還元して子どもの未来を拓く「未来開拓学」を

創出したいと考えました。まずは基礎研究として、子どもの未来に影響を与える発達上の要因や、そうした発達の個人差が生じるメカニズムの解明が重要になります。同時に、発達に問題を抱えている子どもたちを支援する仕組みづくりも不可欠です。子どもたちを対象とした追跡調査を通して、これらの課題に取り組んでいきたいと考えています。

さらに詳しい話は
こちらから



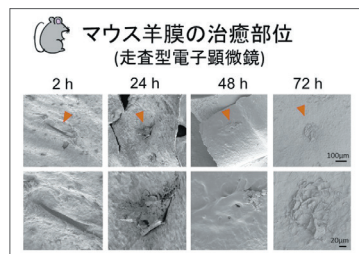
自制心や思いやりの健全な発達には周囲の人との信頼関係が欠かせない

ひとりでも多くの笑顔を守るため、周産期医学の未解決課題に挑戦する。

「健康な赤ちゃんを…前期破水・早産を減らす」

赤

赤ちゃんの健康にとって重大なリスクとなる早産ですが、その原因のひとつに、妊娠満期よりも前に卵膜が破れて羊水が流れ出てしまう「前期破水」があります。一度前期破水が起こってから取れる処置は限られていて、早産を確実に防ぐことは難しいのが現状です。そこで私は、予防と治療の2つの観点から研究に取り組みんでいます。予防の観点では、母体の血液や分泌物の成



電子顕微鏡で撮影した、マウスモデルの羊膜(卵膜の一部)の傷が治っていく様子

分を調べて前期破水の兆候となるマーカーを見つけること、治療の観点では、マウスの卵膜が自然治癒するメカニズムを解明して前期破水の治療法にかなげることが目標です。周産期医療は新生児医療と比べてまだまだ研究が進んでいない分野ですが、一人でも多くの赤ちゃんが元気に生まれくることのできるように基礎研究を積み重ねていきたいです。

さらに詳しい話は
こちらから



最上 晴太

MOGAMI HARUTA

医学部附属病院 講師

2000年、京都大学医学部卒業。産科の臨床医として津沼市民病院、のちに京都大学医学部附属病院に赴任。2009年から2011年、および2015年から2017年までテキサス大学に留学し、前期破水の生じるメカニズムを研究。専門は周産期医学。現在の研究テーマは前期破水の予防および治療法の開発。

無機物から細胞まであらゆるものを繋ぐアパタイト、その可能性を追求する。

「医療レス社会の実現に貢献する『アパタイト学』の構築」

ハ

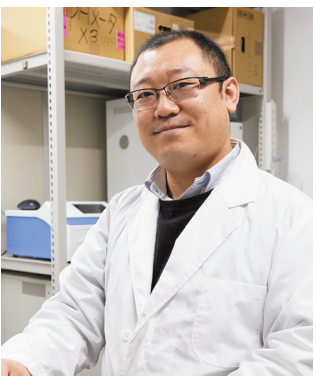
イドロキシアパタイト(以下「アパタイト」)は私たちの骨を構成する物質の約70%程度を占める無機化合物で、金属と生体組織といった異なる材質同士を仲介できる優れた材料でもあります。私はこれまで、人工骨にアパタイトの結晶の形成を促す表面加工を施すことでもっともとの骨と強固に結合させる技術や、アパタイトと医薬品を組み合わせて体内の必要な場所に薬を届ける機能性材料の開発に



常温常圧で体内に近い状態を再現し、アパタイトを合成する実験の様子

取り組んできました。そんなアパタイトの潜在能力をさらに掘り起こしてさまざまな用途に役立てるために、新たな学理「アパタイト学」を創出したいと考えています。学問領域を横断して医療課題の解決に貢献することで、将来的に人々が医療の力を極力必要とせずに健康に生きられる「医療レス社会」の実現をめざします。

さらに詳しい話は
こちらから



藪塚 武史

YABUTSUKA TAKESHI

エネルギー科学研究科 講師

京都大学大学院エネルギー科学研究科博士後期課程修了。2009年より同 助教。2021年より現職。専門は無機材料化学。自然界の生物がアパタイトを常温常圧で合成するプロセスに着目し、人工骨への応用をはじめ生体内で多様な機能を発現するバイオマテリアルの開発に取り組んでいる。

京都大学への ご支援のお願い

京都大学は創立125周年を新たな飛躍の契機とすべく、国際競争力強化・研究力強化・社会連携推進を3つの柱とし、学内ファンド「くすのき・125」をはじめ、“京大力”を発揮できる優れた人材の育成に取り組んでいます。

京都大学の基本理念にある「地球社会の調和ある共存」のために、果敢に取り組む人材。瑞々しい感性により、既存の学問の分野を超え、新しい課題設定と解決策を見出す人材。日本人の心の核である文化を見直し深めることにより、未来社会をつくる原動力となる人材。

皆様のご支援は、これらの人材育成のための資金として、直接活用させていただくほか、運用のための原資としてプールし、その運用益を基礎研究等に充当します。心からの感謝の気持ちを込めて、大切に、そして、有意義に活用させていただきます。

今後なお一層の京都大学基金へのご支援をお願いいたします。



京都大学基金
KYOTO UNIVERSITY FUND
寄付の詳細はこちら

くすのき・125採択者紹介 Vol.2

2023年3月10日 第1版 発行

制作：京都大学 学術研究展開センター

制作協力：京都大学 総務部渉外課基金室

冊子デザイン：株式会社hotozero

本冊子に関するお問い合わせ：

京都大学 学術研究展開センター くすのき・125

kusunoki125@kura.kyoto-u.ac.jp

本誌の無断複製・複写・転載・電子化を禁じます